

芋錢子春夏秋冬

鈴木光夫著

芋錢子春夏秋冬

—俳匠としての小川芋錢—

江夏秋蔵
工業学院図書館
書章

鈴木光夫著

鈴木光夫（すずき みつお）

大正15年（1926）、茨城県八郷町に生まれる。
地方史研究協議会会員。元茨城県牛久町立中根
小学校校長。芋錢研究家。



著書——『小川芋錢の世界—河童はなぜ描かれたか—』教育書籍。『芋錢の幼少年時代』筑波
書林。「芋錢の平民新聞期の漫画」（『アサヒグ
ラフ別冊美術特集・小川芋錢』）朝日新聞社。『小
川芋錢スケッチ抄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』共編・牛久市立
図書館。『神谷伝兵衛』筑波書林。『村方騒動の
展開』茨城県農業史編さん会。「牛久藩の幕末
財政改革」（『茨城県の思想文化の歴史的基盤』）
雄山閣。「牛久藩・片野藩・柿岡藩・志筑藩」
（『関東藩史大事典』・『三百藩藩主人名事典
二』・『三百藩家臣人名事典2』）雄山閣・新
人物往来社。ほか。

住所——茨城県新治郡千代田村下稲吉2056-2

芋 錢 子 春 夏 秋 冬

発行所		著 者	
東京都文京区小石川一の十三の二 振替東京 二二二二四七四番 電話東京 〇三八一四一〇八五三 一〇八五四		鈴木 光 夫	
印刷者		早 武 忠 良	
浪 間 和 子		東京・文京・小石川	
和光市白子		平 成 二 年 七 月 二 十 日 発 行	
株式会社 暁印書館			

（落丁・乱丁等については責任を持ちます）

検印廃止©

和晃印刷・徳任製本

ISBN4-87015-086-7 C0092

老婆言

昔俳聖芭蕉、人に教^(え)へて一句を作るを幼児の舌よりまろびいつるごとくせよと申候。是句は偽^(いつわ)り飾りを去りて真面目なれとの意に候。偕^(さて)玉稿を通覧するに誠に真面目の一句を見出す事能はざるを偏^(ひとへ)に恨み候。諸君は句作をさるゝ時、諸君が飯を喰らひ又色を好むが如く端的に必然に此事に向^(い)ひしか、恐らくは然らざらん、稍^(やや)もすれば廻^(わ)はりくどき主観の色を弄^(もてあそ)びて、己^(おのれ)を欺^(あざ)むき自然を欺^(なま)むきて尚^(なお)此内に詩ありとなす事余りの太平的遊戯に候はずや。如來の国の一茶も申したる正月言葉の虚偽は越の海へさらりと捨て、自然の懷に身を投込み先づ見たま、客観の句より始め給^(え)へ、^{すなわち}即^(すなわち)純客観に依り百練千練し給^(え)へ、然る後始めて純なる主観の声も出で来り真実歡喜の秀句を得給^(え)ふべく候。然し有様^(ありよう)を言^(え)へば古俳聖の申候如く、人生には句作上手より誠の俳諧師こそ望ましく候。我等如き句下手も誠の俳人にはなりたき者と日に日に念じ居^(お)る事に候、誠の俳人たらんには、常に自然に面^(おも)を向くべきものに候、穴賢^(あなかし)。

盲言、多罪

芋錢子

(『芋錢子文翰全集』より)

序

中 河 与 一

先年『小川芋錢の世界——河童はなぜ描かれたか——』といふ名著を教育書籍から出された鈴木光夫さんが、今度『芋錢子春夏秋冬——俳匠としての小川芋錢——』といふ本を出されることになった。鈴木さんはかつて数年間、芋錢夫人と共に同じ家で生活せられた方で、この上なき芋錢理解者・研究家ではないかと思ふ。僕自身も芋錢のことでわからぬことがあれば、皆この人に尋ねる。今度、俳句・短歌の研究を志して、漸く完成せられたといふ。

芋錢には沢山の詩歌がある。これを収集解読するためには、その身の細大を知らなければならぬ。類書のあることは勿論であるが、こんどの新著は、原典にあたつてその全容を解明した労作。また丹波の人、西山小鼓子氏の如き芋錢縁族の人から提供せられた未発表の俳句や、自身で発掘せられた新資料も数多く加へられてゐる。

従来、芋錢の俳匠と云はれる側面についての本格的論稿は皆無に等しいものであったが、解説においても今回、これを明快に説きあかしてゐる。中年から芭蕉に傾き、やがて晩年に至つて良寛景仰の生活に入り、良寛に迫る生活から良寛と同根の自然観・宇宙観に到達してゐる「解題」は、みごとと云はざるを得ない。

芋錢子春夏秋冬 目次

——俳匠としての小川芋錢——

口 絵

老婆言

序 中河与一

芋錢俳句・短歌の世界（序にかえて）…………… 5

凡 例…………… 39

一、俳句…………… 41

1、明治期（明治三十年～明治四十四年）…………… 41

2、大正期（大正元年～大正十四年）…………… 117

3、昭和期（昭和元年～昭和十二年）…………… 149

4、年次不詳…………… 267

二、短歌…………… 287

1、明治期（明治四十三年～明治四十四年）…………… 287

短歌や俳句は、一応人々に理解しやすいものを持つてゐる。それだけに、今度の新著は芋錢研究に重大な寄与を果たすものと云へる。敢て推薦しょうよう慫慂する所以である。

(作家)

2、大正期（大正元年～大正十四年）	291
3、昭和期（昭和元年～昭和十二年）	303
4、年次不詳	329
三、参 考	337
引用書一覧	339
小川芋銭の芸術	345
芋銭略伝	357
芋銭年譜	383
参考文献	407
索引	413

芋銭俳句・短歌の世界（序にかえて）

（一）

小川芋銭は、日本的南画を完成した近代日本画壇の巨匠である。画聖とも称され、築きあげた独自の自然観や宇宙観から道釈人物、実景的風景、水魅山妖などにわたって数多くの秀作を残したが、なかでも河童は、生涯好んで描き続けたことから、一般に「河童の芋銭」と称され親しまれている。しかし、これが芋銭の全容ではない。書家や俳人、歌人としての側面がある。特にその俳句や短歌からは、求道者としてのきわめて人間らしい芋銭像が浮かび出してくる。すなわち、そこには芭蕉思慕者としての風狂の精神の追求や、良寛景仰からの五合庵生活に迫る修行の実践がうかがわれ、そこからは、命あるすべてのものに愛を注ぎ究極の美を見い出す芋銭の真の姿を見ることができ、いいかえれば、画家としての作品のみでは把握し難い芋銭像をかいま見ることができるのである。したがって、これらから、芋銭の作品を改めて問い直すことも可能であるに違いない。この意味で、芋銭側面の俳句や短歌の世界は、芋銭理解のためにきわめて重要と思われる。

本書は、このような趣意で、現時点までに収集できた芋銭の俳句・短歌の作品を、年次ごとに収

録したものである。いま、本書を繙かれる方のために、芋銭の俳句事始めから晩年にわたっての俳句や短歌を少しく抄出し、その足跡の概要を述べておきたいと思う。

(二)

芋銭を「絵を描く芭蕉」とも称しているが、その句作はかなり早く、芋銭三十歳の明治三十年にさかのぼれる。茨城県土浦（土浦市）の俳誌『香墨新誌』掲載の

春風に長堤十里草あをし

こがらしや首縮めゆく炭團賣たどんうり

足袋片足なくしてもどる子供哉かな

などの三句がそれである。

翌年には、正岡子規しきの俳論「明治三十一年の俳句界」に、常陸における有力俳人として茨城日報記者の桜井芳水とともにその俳名「牛里ぎゅうり」の名も挙げられている。また、同二十八年から三十三年にかけて各地の俳人から送られてきた俳句を子規が排列した草稿本（『承露盤』昭和十二年刊）の明治三十一年分には、高濱虚子たかはまきよし、河東碧梧桐かわひがしへきどうら多くの俳人に伍して芋銭の句が二三句も見られる。さ

らに、明治三十二年には、茨城県水戸（水戸市）に子規派の結社風月会を設立し自らその中心となつた芳水が、茨城県取手（取手市）に同派の水月会を結成した時、芋錢は翌年一月からこれに参加もしている。当時の句に、

鴨啼て灯火くらし筵織
かもない とうか むしろおり

がある。それは、農村に住み、その貧しさに耐えて営々として働く農民の労苦を肌で感じとつた句である。

この二年後の明治三十四年から三十六年にかけては、子規および虚子・碧梧桐編の『春夏秋冬』が刊行された。これは、その「編注」に述べられているように、明治三十年以降の絶頂期にあった子規および門下逸材の成果が収録されている名句集。これにも芋錢は、

百敷や土塀崩る、春の雨
どべい くる 春の雨

嫁は伯母は桑摘む茶摘む時鳥
よめ おば はくく む ちゃくく ときどり

蠶豆の花のあなたや麥林舎
からまめ はな の あなた や ばくりんしゃ

栗の花散るや檐端の古菖蒲
くり はな ちる や えんば の ふるしやうぶ

新蕎麥や月下に叩く俳諧寺
しんそば や げが げに たたく はいかいでら

きりくす鳴くや貧女が機の下
狐鳴いて狸のふぐり寒からん



漫画・人日(漫画春秋) 1910年(明治43)

など七句の掲戴が見られる。

芋銭が子規門の俳人となったのは、どのような経緯からであったか、いまのところそれを証するものはないが、明治三十二年十一月四日の梅溪居において催された句会の記録によると、内藤鳴雪とともに下村為山(牛伴)の出席がある。為山は、彰技堂において芋銭とは同窓であった。昭和八年には、丸山晚霞、村居鉄城らも加えて師本多錦吉郎の碑を東京芝泉岳寺畔に建立している。為山の子規への入門は早く、明治二十七年の『俳句二葉集』には一句掲載、『承露盤』明治二十八年の部には三三句、明治二十九年の部には二二句が見えている。また「明治二十九年の俳句界」には、子規門有力俳人としてその名が挙げられている。芋

銭は、少年期上京後明治二十六年帰郷、翌々年妻帯しやむなく農に専念していたから、もしかしたら為山からの勧めによったのかも知れない。いまのところ推察の域を出ないが、あり得たことのように思われる。それはともかく、芋銭は、明治三十年代初頭に水戸においても俳人として知られるようになっていたことはたしかである。詩人野口雨情が、この頃水戸において初めて芋銭を紹介された時、画家としてでなく俳人として理解していたことが『定本野口雨情』にも見えている。

(三)

当時芋銭は、茨城日報の記者渡辺鼓堂こどうに投稿漫画を認められて以来、鼓堂が日刊『いはらき』に編集長に迎えられたことから引き続き『いはらき』に漫画を送っていた。同紙には主筆の佐藤秋蘋しゅうりんがいて、芋銭の漫画を鼓堂同様高く評価してくれたことから次第に秋蘋との交友がはじまり、秋蘋を中心とした文学仲間とも深い関係をもつようになっていた。こうした機縁で明治三十七年一月、秋蘋提唱の茨城の文芸団体「木星会」設立にも参画、その第一回例会には、

ぽかんとして木菟みみずくくる、枯木哉

寒梅や笛破りたる人は誰



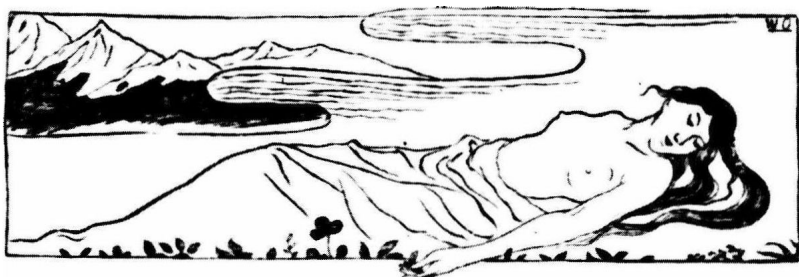
漫画・まめの花(いはらき) 1903年(明治36)

などの句を作っている。

また、その前年、秋蘋の紹介で幸徳秋水を知り、秋水、堺利彦ら主催の日露戦争非戦論を高く掲げた週刊『平民新聞』に漫画家として参画、以後、その後継紙『直言』、『光』、日刊『平民新聞』、『大阪平民新聞』、『社会新聞』等に、当時の農村の実情を訴えた農民漫画や非戦論・社会批判漫画等々、すぐれた作品を掲載した。

あら清し^{ばくしゅう}麦秋の天に練雲雀^{ねりひばり}
ほしひらす
 時鳥四谷の空の月七日

この句は、この期間、堺利彦が週刊『平民新聞』に論説「嗚呼増税」を掲げ、新聞紙条例違反に問われて服役、二カ月後に出獄となったが、芋銭がこれを祝して作った句。前書には「枯川^{こせん}先生今日獄を出づると聞き」とある。当時の芋銭の思想傾向の一端が示されているよう。また、「子を残して軍に死する農夫の家にて」と前書さした



漫画・憂きことに(直言) 1905年(明治38)

二つ子に箸取らず雑煮悲しさよ

の句には、非戦論に共鳴する芋銭の、戦争によって夫を亡くしわびしい元日を迎えた農婦に対しての深い同情が寄せられている。

当時芋銭は、貧しい農村の解放を秋水らの社会主義に求め積極的に反戦の農民漫画を描いたが、なかでも『直言』創刊号を飾った「憂きことに」の作品は特にすぐれている。この画賛句が、

憂きことになれて雪間の嫁菜かな

である。「憂きことに」の作品は、半裸で野に横たわる婦人の図。婦人はやや都会的な感じもするが、画賛句から見ても、出征した夫の留守を守る若き農婦像である。憂きことに耐えてそれは馴れてきたが、ふと気づくとわびしさが込み上げてきて悶え、しばし雪の間の野に伏して嫁菜を摘み、思いを戦地に馳せるという図。たくみに描かれたわびしく悲しげな農婦の表情やその画賛句から、胸をさされるような心情が伝わってくる。

人道主義に立つ芋銭の反戦思想は、単に銃後の社会、特に農村に向けられたばかりではない。雄々しく戦地に立った多くの兵士にも厚い思いが寄せられている。つぎの句がそれである。

寒からふ遼陽城りょうやうじやうの後の月

日露戦争後は、社会全体をおそった経済恐慌に強い関心を示し、その風刺漫画も描いているが、やはり一層深刻さを増した商品経済化や資本の支配化がすすむ農村に目を向け、その実相を描く漫画もふえてくる。以後芋銭は、友人杉田雨人うじんの勧めで明治四十一年に『草汁漫画そうじゅうまんが』を上梓、漫画家として不動の地位を獲得した。これには、こっけい体の漫画にそれぞれ画賛句が付されている。本書では性格上、その画賛句のみを挙げたが、そのうちの特色ある句を拾ってみよう。つぎが、それである。

初雁はつかりや一人耕す山畠

わかれたる身をふみこみて田植かな

きりはたりてふく校ひの間わすれぬ男おとこ唄うた

これらの三句は、日露戦争によって寡婦となった農婦に同情を寄せる句のようである。ひとり山